

思い出胸に文鎮磨き

大東・大原小 卒業記念 鉄作り締めくくると

古くから地域に伝わる製鉄文化の学習に取り組んでいる一関市大東町の大原小学校(佐藤啓校長、児童98人)の6年生は13日、たたら製鉄体験で取り出した鉄から作った文鎮の仕上げ作業を行った。1年間の学習の締めくくりで、卒業記念品の文鎮に磨きを掛け、鉄作りの思い出を胸に刻んだ。

鉄作りの学習はたたら製鉄などの伝承に取り組み、元のボランティア団体「ホツバの会」の指導で旧内野小学校時代の1999年から続けており、2023年度で25回目。同会の会員や中学生がたたら製鉄に使う炉作りなどを行い、6年生は昨年8月に大原の砂鉄川で鉄の原料にする砂鉄を採取。9月には砂鉄川最上流部にある砂鉄川たたら製鉄学習館でメインのたたら製鉄を体験し、二つの炉から14kgの鉄を取り出した。採取した鉄は大原市水沢にある及源鑄造の協力を得

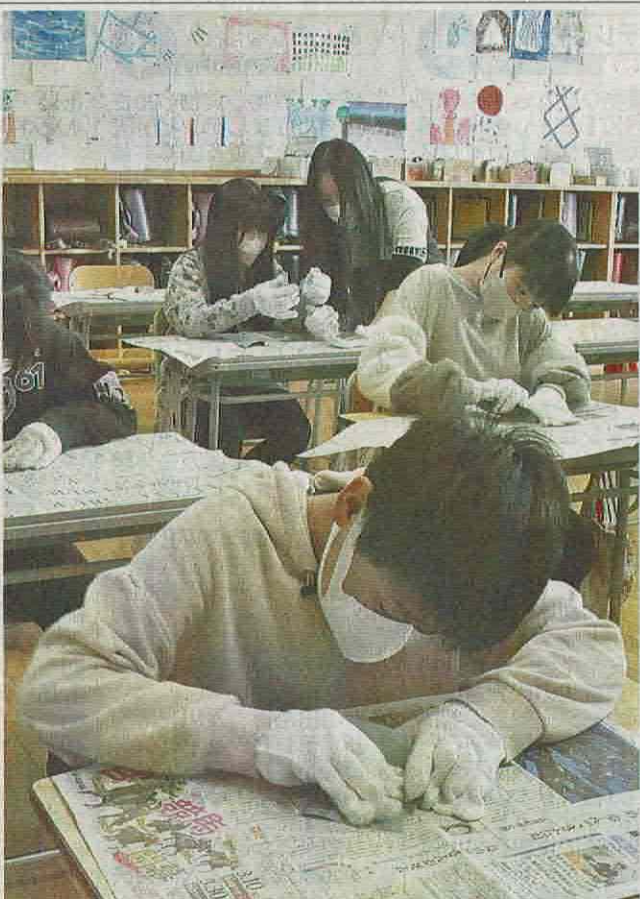
て炉で溶かし、鑄型に流し込んで縦約6・5センチ、横約5センチの文鎮に成形した。

同日はホツバの会の佐々木英一副会長と勝部欣一事務局長が大原小を訪問。6年生24人が一人一人「大原」「絆」の文字と同校の校章、卒業式がある「2024・3・19」の文字が入った文鎮に工具や紙やすりなどで磨きを掛けた。

河野大和君(12)は「自分たちが集めた砂鉄が立派な文鎮になってすごいと思う。工場で型に流す作業を

見た時に鉄の熱さを肌で感じた」と鉄作りの学習を振り返った。加藤千捺さん(12)は「みんなで協力して砂鉄を取ってできた文鎮なのでうれしい。中学校に行ったら友達をいっぱいくりたい」と中学校生活にも期待を膨らませていた。

勝部事務局長は写真や映像を映しながら1年間の活動を振り返り、「鍛錬や錬磨、鉄は熱いうちに打てなど鉄作りから生まれた言葉やことわざはたくさんある。自分たちの手で世界に一つだけの卒業記念品を作ることができるのは素晴らしい。中学校に行ってもいろんな分野で自分を磨いて頑張ってください」と6年生にエールを送っていた。



卒業記念品の文鎮を紙やすりなどで磨いて仕上げる大原小の6年生



大原小6年生がたたら製鉄で取り出した鉄から作った卒業記念品の文鎮